

50年よせて3

いよいよ光陵祭である。20周年記念誌『光陵の20年』には、開校2年目の11月に「生徒作品展」、翌3年目の11月に「文化祭・後夜祭」が実施されたことが記載され、4年目の1969年によろしく「光陵祭」の語が現れる。「生徒作品展」から数えて、今年的光陵祭はたしかに第49回目となる。

その第49回光陵祭のメインテーマを「立ち上がれ同士たち 革命の光陵祭」と光陵生は銘打った。「いささか仰々しくもある」とプログラムに記したが、若き人々の祭典は、情熱的で燃えたる叫びを内包するくらいでちょうど良い。一方で、どこがいったい革命？などと誹られることなどなければ良いのだが、と多少心配もしている。蛇足だが、よく引き合いに出す『新明解国語辞典』には「同志」とあり、「最近『同士』と書く向きが多い」とし、「自分と同じ意見（目的・理想など）を持つ人」と説明している。ポスターに目を転ずると、淡い色調の中にキーボードに向かう生徒がいる。画面に施された数本の線、その線が左右で反転して配置される意図は何だろうか。そこに記された「羽ばたけ、個性」の文字。光陵祭だけにとどまることはなかろう、皆さん一人ひとりに届くと良いとつくづく思う、そのようなステキなことばである。

50年という節目とは、これ迄の歩みを振り返るときであるとともに、新たなことへの挑戦の起点、心持ちを新たにするときでもあると思う。50周年にあたっての特別なイベントは勿論大事だが、光陵祭のような、連綿と継続し、今年も開催となる行事の中から何かを次代に繋げること、それは、50周年のいま光陵に身を置く皆さんや私たちにとって、より大切なことであり、ちょっと気は重くもあるが皆さんや私たちにとっての使命なのであろう。

皆さんは、仲間とともに何をどのように紡ぎ、次代の光陵生に何をどのように繋いでいくのか。

この夏のある新聞記事から

20代だった私は、そのときはじめて歴史を肌身で知ったように思った。石畳に耳をつけると、はっきりと地鳴りがして、地ひびきが伝わってくる気がした。政治権力のコマ一つがはじかれると、国家がなだれを打つように動き出し、昨日までの秩序が崩壊して日暮れに一挙に崩れる。歴史が動く一瞬であって、それを境にすべてがガラリと変化し、もはや誰の手にもおえない力が前へ前へと押しやっていく。

8月14日の『朝日新聞』に掲載された、池内紀さんおさむ寄稿の「私の歩んだ戦後70年」の一節である。1940年に生まれ、「うぶ声をあげたばかりの戦後民主主義のなかで教育を受け」たものだから、「おそらく戦後教育史の中で、もっとも混乱していた時期だったのだろう。古い革袋に新しい酒を盛ろうとして、おおかたがこぼれ落ちた。新しい理念を伝えるべき人たちの大半が古い世代だった」と回想される。その池内さんがヨーロッパに遊学しウィーンに滞在されていたとき、「プラハの春」がおこった。チェコ国民の圧倒的な支持のもと繰り広げられた自由化の運動と、ソビエト連邦軍を中心とする東ヨーロッパの軍による自由化への制圧。「歴史がきしみながら動いていた。ヨーロッパの小国はとりわけきしみに敏感だ。それは戦車の音とともにやってくる。」

ドイツ文学者である池内さんは、「私の歩んだ戦後70年」の中で「多少は深くヨーロッパとつき合ってきた」と自らを位置づける。そして、EUに代表される現代ヨーロッパの協調関係、あるいは経済的な力関係について、「ファシズム、ナチズムの暴虐を許した過去への深い反省が基盤にあつてのことである」とし、「さらにもう一つ、哲学者カントの『永遠平和のために』が背骨の役目を果たしている」とする。はたして『永遠平和のために』とはいかなる書なのか。

カントの『永遠平和のために』は、フランス革命が始まって間もない1795年にあらわれた。それは革命の混乱に乗じた争いが各地で起こっていた時期であり、少しさかのぼると、オーストリア継承戦争から七年戦争へという時流によりヨーロッパの国々が戦争の状態にあつた、そんな時期であつた。

カントはこの書の中で次のように言う。

“隣り合った人々が平和に暮らしているのは、人間にとってじつは自然な状態ではない。戦争状態、つまり敵意がむき出しというのではないが、いつも敵意で脅かされているのが自然な状態である。だからこそ平和状態を根づかせなくてはならない。”

“戦争状態とは、武力によって正義を主張するという悲しむべき非常手段にすぎない”

“戦争それ自体は、とりたてて特殊な動因を必要としない。名誉心に鼓舞されて戦争は起きる。”

“行動派を自称する政治家は、過ちを犯して国民を絶望の淵に追いやっても、責任は転嫁する。対外戦争のために国債を発行してはならない。借款によって戦争を起こす気安さ、また権力者に生来そなわった戦争好き、この二つが結びつくとき、永遠の平和にとって最大の障害となる。”

“国の軍隊を……べつの国を攻撃するため他の国に貸すなどということはあってはならない。どちらに正義があるか決定するのは、戦争の結果でしかない。”

“殺したり、殺されたりするための用に人をあてるのは、人間を単なる機械あるいは道具として他人（国家）の手にゆだねることであって、人格にもとづく人間性の権利と一致しない。”

“離れた国同士が友好的な関係を維持し、ひいてはひろく法で結ばれ、人類がついに世界市民となることも可能なことなのだ。戦争を起こさないための国家連合こそ、国家の自由とも一致する唯一の法的状態である。”

それでも、その後の国際社会に戦争、侵略が絶えることはなかった。

カントの生きた時代と21世紀の今日とでは異なる時代性があるべきである。しかし、第二次世界大戦終了後の20世紀後半以降においても、体制の異なり、政治および軍事力のぶつかり、あるいは宗教の側面を前面に押し出した対立など、戦争がおこる構造は多く（と言いたくないが）存在し、実際に戦禍、戦渦は絶えず、人命の消失、難民の発生、あるいは生活環境や文化財の破壊など、国際社会が共有すべき難題は山積している。カントは“永遠平和は空虚な理念ではなく、われわれに課せられた使命である。”と言うのであるが、これは18世紀に生きた人々にとっての理念であり課題であったことにとどまらず、現代に生きる私たちの理念であり、課題である。

（ “ ” で引用した文はすべて イマヌエル・カント『永遠平和のために』 池内紀訳 2015.6. 集英社 による。）

池内紀さんについては、「校長室から1」で『なぜかい町一泊旅行』（光文社新書 2006）を紹介した。以前に勤務した学校においても『人と森の物語』（集英社新書 2011）を紹介している。どちらも、決して冗長になることなく、けれども優しさの感じられるエッセイである。

「私の歩んだ戦後70年」の中で池内さんは、『永遠平和のために』を「220年前に世に出た小さな本だが、それは長い歳月を経て国際連合を生み出すもととなり、日本の憲法においては、画期的な九条の基本理念となった。」と渾身の評をつける。まさにそのとおりだと思う。池内さんは翻訳するにあたって、難解な語を避けてできるだけ平易な表現に努められた。たしかに小さな本で、訳もわかりよいものだから、一通り読むのに1時間もあれば十分だ。

戦後10年余りで生まれた私と、戦後55年余りに生まれた皆さんでは、「戦後」という言葉に抱くイメージも、そのことへの思いも異なるにちがいない。それは、日中戦争のさなかで日米開戦直前の時期に生まれた池内さんと、戦後世代の私の間ではもっと大きな違いがあるものとも思う。

そのような世代の異なりによる価値観の相違もあろうが、この夏「私の歩んだ戦後70年」を読み、それに触発されて『永遠平和のために』を読めたこと、また、そんな本があることを光陵生に伝えることができることを、私は幸運に思う。

帯に書かれたこの書の副題は「16歳からの平和論」である。